
必携 精神医療保健福祉キーワード事典

高木俊介，下里誠二，竹端 寛編著

合同出版，B5判384頁，3,960円，2026年1月刊

（滋賀県立精神保健福祉センター）辻本哲士

精神医療保健福祉の分野における事典は、「中立公正」という建前のもとに客観性が重視され，無味乾燥な用語解説の寄せ集めになりがちである。本書は，そうした従来のあり方とは異なるスタンスで書かれている。

本書の第一の特徴は，事実の説明と執筆者自身の意見とを適切に区別しながらも，後者を積極的に打ち出すという編集方針にある。一般的な事典が「これはこういうものだ」という説明にとどまるのに対し，本書は「こうあるべきだ」という提言を示している。各キーワードを担当する執筆者は，現場の第一線で積み重ねてきた豊富な経験を土台に，単なる説明にとどまらず自分自身の考えを率直に述べている。必然的に執筆者によって論点の重みづけや意見

に違いがあり、その多様な発言こそが、現代の精神医療保健福祉の複雑な現実を映し出している。

第二の特徴は、これまで専門家の間でも周縁に置かれ、あるいは触れづらいとされてきたテーマに対して、正面から検討している点である。各執筆者は、現代的な課題をその場限りの出来事として捉えるのではなく、政策や制度、世相や文化の歴史的な流れのなかに位置づけ直している。さまざまな統計データや文献的・学術的な根拠も丁寧に示されている。

第三に注目されるのは、全体を通じて、従来の医療モデルを踏まえたうえで、社会モデルさらには人権モデルへのパラダイムシフトを目指している点である。障害者権利条約が掲げる「私たち抜きに私たちのことを決めないで (Nothing About Us Without Us)」という当事者主体の考え方が一貫して流れており、本書全体の記述の姿勢を方向づけている。この立場から、いくつかの項目における既存の制度や慣行への一考、精神科医療の構造的な改革を求める提言は、本書が意図するメッセージの発信となっている。日本の精神医療保健福祉を国際的な水準に近づけようとする本書の姿勢は、グローバルな文脈において説得力がある。

編者は「一つひとつの項目がそれぞれの著者（執筆者）の広い視野と深い見識を込めた総説となっている」としている。その結果、本書は幅広い領域を網羅しながらも、各論では現場の実践に根ざした具体的な考察が展開される構成となっている。「中立公正」な均一な記述を避け、執筆者それぞれの問題意識と表現スタイルを活かしたことは、事典という形式の硬直性を解きほぐす編集上の工夫となっている。メンタルヘルス対策をめぐる制度的・社会的な状況が急速に変わりつつある今、求められているのは既存の知識を整理した参照ツールではなく、現実の困難に誠実に向き合うことのできる「知」である。本書は、初学者にとっては専門的な知識の地図として、経験を積んだ実践者にとっては自らの立場や姿勢を再考するための羅針盤として機能する。まさに精神医療保健福祉分野の事典として「必携」の一冊である。